

# 大学入試問題の比較研究

—国立大学入試問題形式の推移について (1996-97)—

深 沢 清 治

## 1. はじめに

英語教育の一連の過程において、教授・学習をその入口とすると、テスト・評価は教授学習の結果の反映としての出口であり、またテスト・評価ののちの教授学習過程に大きなフィードバックを与えるべき重要な活動である。大学入試という現象をあげても、その内容や形式についてさまざまな批判や提言がなされているが、依然としてこれが高等学校での英語教育の道具的目的としての位置づけは大きくは変わらないであろう。とすれば、今後の中等英語教育に対して、大学入試の持つ影響と責任は極めて重大であり、長期的目標として現代の英語教育理論の動向に対応して効率化を図るだけでなく、現実的目標として受験生の通ってきた教育課程の動向への対応も求められる。

平成6年度からの高等学校の教育課程が改定され、オーラル・コミュニケーションA, B, Cなど新たな科目が導入されて以来、高等学校現場でも英語授業への新しい取り組みが模索されてきた。新課程を修了した受験生を迎え、大学側はどのような入試問題を提供したのだろうか。それは旧課程修了者に対する入試問題と比較してどのように進化、発展したのであろうか。英語教育課程のひとつの節目に際して、そこで養成された英語学力の構造がどのように捉えられ、測定されたのかを後付けすることは、テスト作成者をはじめ大学英語教育に関わる者にとって意義のあることであろう。

小論は、平成6年度からの高等学校の教育課程の変化を受けて、新・旧の教育課程を経てきた受験生に課された大学入試問題の検討プロジェクトの中間報告である。1996-97年の2年間の国立大学の入試問題を検討することにより、大学入試作問側の対応の変化の有無および傾向を探ろうとするものである。

## 2. 何をどのようにテストするか—問題の内容と形式の検討

### (1) テスト内容と形式の類別研究

テスト作成における主要なテーマは内容と形式の2つの側面である。日常の小テストのような単一技能・言語形式の問題から入試問題などのような総合的な技能を測定しようとする問題まで、言語運用能力を単一下位技能と捉えるか、あるいはより統合的な能力と規定するかによってさまざまな種類が考案されている。このうち特に「何を」にあたる部分を英語テスト作成マニュアルとして網羅的に類別・整理した青木、他(1989)は、テスト内容と形式を次のように分類している。

#### I 言語要素にかかわるもの

##### 1 音声

(1) 語の発音

(2) アクセント

- (3)文強勢
- (4)文の区切り（および内部開放接続）
- (5)イントネーション
- 2 語彙
- 3 文法
  - (1)屈折
  - (2)機能語
  - (3)イディオム
  - (4)構造
- II 単一技能にかかわるもの
  - 1 リスニング(L)
    - (1)情報の概要や要点の把握力にかかわるもの
    - (2)論理的な思考力に焦点をあてたもの
    - (3)予測力に焦点をあてたもの
  - 2 スピーキング(S)
    - (1)絵や写真に描かれていることについて述べる (picture description)
    - (2)絵を照合する (picture identification)
    - (3)絵を用いて物語をつくる
    - (4)ある話題について短い話をする
    - (5)ある人物や事物について話す
    - (6)即興のロールプレイを行う
    - (7)設定された場面で、問題解決のために必要な発話をする
  - 3 リーディング(R)
    - (1)粗筋・概要の把握力にかかわるもの
    - (2)要点の把握力にかかわるもの
    - (3)論理的思考力に焦点をあてたもの
    - (4)予測力に焦点をあてたもの
    - (5)表面に表れていない要素を文脈から推論する
    - (6)情報を得るスピード
  - 4 ライティング(W)
    - (1)絵または写真を利用する
    - (2)英語を手がかりにして作文する
    - (3)日本語を手がかりにして作文する
    - (4)自由作文
- III 複合技能にかかわるテスト
  - 1 クローズテスト 文字刺激と文字反応
  - 2 ディクテーション 音声刺激と文字反応
  - 3 面接法 音声刺激と音声反応
- IV 伝達テスト (略)
- V 文化にかかわるテスト (略)

## (2)大学入試問題の内容と形式分類

大学入試問題の検討は、その手法として問題内容と形式の分析とに分類される。問題内容については、題材やトピック別に詳細な追跡分析作業が毎年、受験産業によって実施、公表されている。例えば、1997年度大学入試問題〈国公立大編〉によれば次のような分類が実施されている。これにより出題者側の題材・トピック上の選択、判断の傾向を意識化することができよう。

- ・文化〈言語・コミュニケーション〉、〈教育・学校・学問〉、〈思想・哲学・宗教〉、〈歴史・人類・文明・風俗〉、〈音楽・芸術・文学〉、
- ・日常生活〈家庭・家族／婚姻／服飾・化粧／料理・食事／旅行／趣味・娯楽／健康・医療〉
- ・自然〈自然・環境／宇宙・地形／地理／天候・気候／動物・植物〉
- ・科学・技術〈建築・設計／機械・コンピュータ／化学・金属／通信・メディア／資源・エネルギー〉
- ・産業〈交通・運輸／職業／製造・商取引／商業・貿易／農業・漁業／工業／報道・出版〉
- ・社会〈法律／経済・金融／国際関係／軍事／政治〉

これに対して、形式上の分類に関してはそれほど多くの研究は発表されていない。その理由として、あまりに資料が質・量ともに膨大であり全体を鳥瞰的に分析研究を行うことが困難であることが指摘できる。また、技能別分類あるいは複合技能を要するものまで出題者の意図に応じてテスト形式は多岐にわたっており、確固としたガイドラインが設定されていなかったことに起因すると考えられる。

テスト形式の調査の一例として、清水(1997)が1989-1997年の共通一次試験からセンター試験の変遷を1) 共通一次最後の年からセンター試験への移行期、2) 1992年以降の安定期、3) 新学習指導要領開始期、の3つの時間軸で分析した研究がある。それによれば、過去のセンター試験問題の構成を以下の5領域に大別している。

- A. アクセント・単語の発音・文強勢を問う音声を中心とする問題
- B. 文法・語彙の基礎力を問う問題
- C. 整序問題を通じて作文力をみる問題
- D. 対話表現の問題
- E. 読解を中心とする問題

清水の分析のうち、本論の目的である新カリキュラム下でのセンター試験の変化に限定すれば、分析の結果、変化が認められたものとして読解問題が配点比率で全体の50%を越え、長文の一部が対話文となったという。また、図表を用いた問題でも項目数・配点ともに増加し、英文の長さも一挙に300語以上になり、本格的な読解問題としての印象が強まったとしている。新指導要領の趣旨の反映か、口語によるコミュニケーション場面を想定した問題が増えたり、より長い英文を、効率よく読みとる力が要求される方向にあるとまとめている。

これに対していわゆる各大学の行う二次試験の試験問題の検討は、膨大な量のためか組織的な研究は数が少なく、いわゆる受験産業による大まかな分析に留まっている。また、それは試験を受ける側のための分析であり、作成する側の内省を支援するものにはなっていない。そこで、大学入試問題が高等学校のカリキュラムの変化という影響を受けて、それをどのように反映したものになったかを検討してみることが必要であろう。

### 3. 1996-1997年度の大学入試問題形式の分析研究－国立大学入試問題から

#### (1)目的

高等学校の新・旧教育課程の移行の節目に合わせて、入試問題（前期日程）がどのように変化したのかを問題項目分析により後づけすることを目的とする。

#### (2)分析資料

『全国大学入試問題正解・英語<国公立大編>』（旺文社版，1996・1997年）を資料として、公表されている国立大学の前期日程の入試問題を分析対象とした。また1大学内において学部間で問題が異なる場合には、教員養成系学部・課程のうち原則としてリスニング問題が課された学部・学科の問題を分析対象とした。

#### (3)分析方法

分類カテゴリーとして、オーラル・コミュニケーション、リーディング、ライティング、言語要素（発音、文法、語彙）の4つの大分類をもとに、さらに以下のような15の典型的な問題指示文を持つ問題形式・項目を下位分類として設定し、各形式・項目の分布調査を実施した。

#### 入試テスト分類カテゴリー

##### I. オーラル・コミュニケーション(O)

listening comprehension, dictation

##### II. リーディング(R)

(1)英文和訳（下線部）「下線部を日本語に訳しなさい」

(2)英文和訳（全文）「全文を日本語に訳しなさい」

(3)概要・要点「下線部の内容を具体的に述べなさい・説明しなさい」

(4)情報検索（非翻訳問題）「～の指すものを書き出しなさい」「同じ意味を持つものを選びなさい」「～は何（誰）ですか」「次の選択肢から選びなさい」

(5)要約「～語以内でまとめなさい」

(6)意見陳述「～に対するあなたの意見を述べなさい」

##### III. ライティング(W)

(1)絵の描写 (picture description) 「絵を見てストーリーを作りなさい」

(2)英語のキュー

(3)日本語のキュー（部分訳・下線部訳）「下線部を英語に直しなさい」

(4)日本語のキュー（全文訳）「全文を英語に直しなさい」

(5)課題・自由英作文（手紙の返事，トピックを与えられて～語以内で）

##### IV. 言語要素

(1)pronunciation（発音，スペリング，イントネーション，アクセントなど）

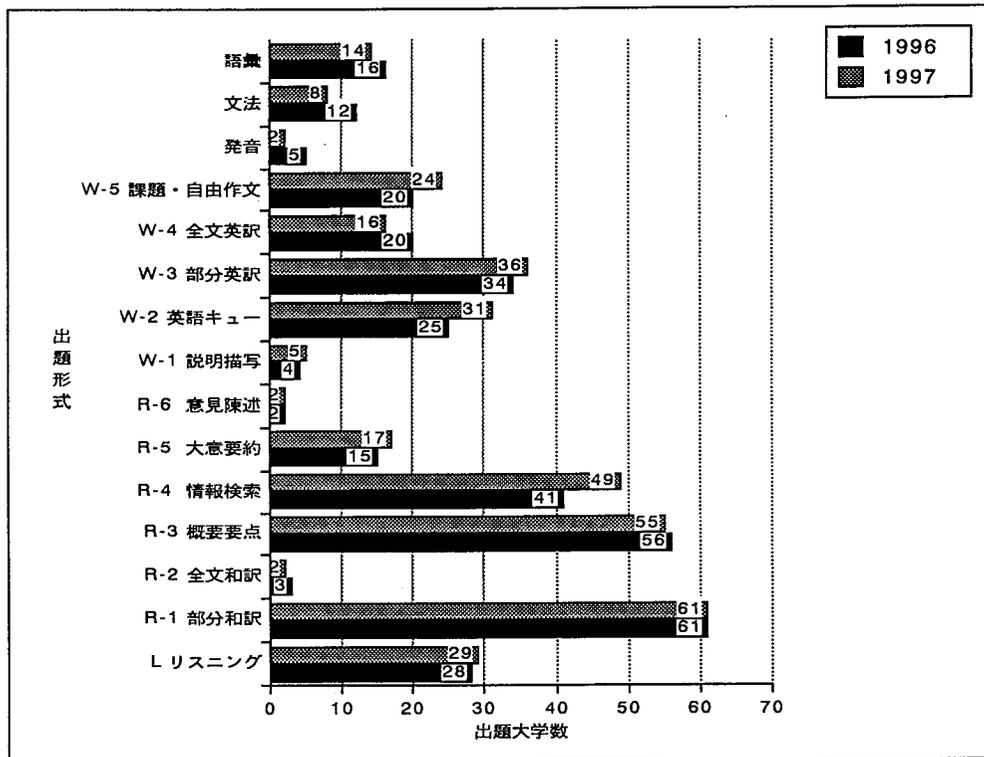
(2)grammar

(3)vocabulary（paraphrase, etc）

上記15の分類カテゴリーに基づき、各問題に求められている解答から問題形式を類別した。分類に際しては、各大学の入試問題中に大問・小問を問わず、ある問題形式が1問でも存在すれば、チェック・マークをつけた。複数の形式に分類される可能性がある場合には複数の分析者間で協

議し、1つの問題形式に統一した。

図1 大学入試の問題別カテゴリ分析 (1996-97)



#### (4)結果と考察

本調査研究の対象となった65の国立大学・学部の入試問題の問題形式分布は、図1のとおりである。大学・学部の数は該当する問題形式が1問以上採用されていることを示している。問題形式の延べ種類は大学間で差があり、15種類のうち最大10種類から最低3種類までが採用されているのがわかった。

まず、全体として予想通り、両年度間に問題形式に大きな変化は見られないことがわかる。つまり、高等学校の教育課程の変化に対応した作問という意識が希薄であることの表れといえよう。このような全体的特徴に対して、個別の分類カテゴリ別に分析をしてみると、その中でいくつかの良い方向が見受けられる。

第一に、訳からの脱却がわずかな傾向として見られる。そのうち、特にリーディング、ライティングともに全文訳が確実に減少し、代わって部分（下線部）訳や課題作文・自由作文などが増加している。新指導要領に示された「概要・要点」をみる問題は両年度とも下線部訳と拮抗する程度となっており、英文和訳からの脱却は確かな方向として位置づいているといえよう。

最大の変化は、65大学・学部中、最大8大学がリーディング問題のうち日本語訳を求めない情報検索読みの問題を新たに採用していることである。英語と日本語の間の訳す作業は長く入試問題の代名詞とされてきたが、実際には変化の兆しが見える。採点基準と配点比率は公表されてい

ないため、これが全体の配点上、どのような重みづけを持たされているかは判断できないが、訳を介する問題を縮小しようとする傾向が内在していることを推測できるであろう。

これに対して、従来からの問題形式で、妥当性が疑問視されている言語要素に関する問題は、発音、文法、語彙のいずれにおいても減少している。中には問題本文とは関連性のない語彙問題も出題されており、今後さらに検討が必要であろう。

#### (5) 今後への示唆と展望

今後への課題として、第一にリスニング導入が挙げられる。今回の分析大学のうち、リスニングを導入している大学・学部は全体の半数に留まり、しかもオーラル・コミュニケーションを経験した受験者に対して、リスニングの導入はほとんど進んでいない。今後の高校英語教育においてオーラル・コミュニケーションはさらに重視される方向にあり、これをいかに入試に位置づけていくかは、大学入試の大きな課題であろう。

第二に、今後とも訳からの脱却が英文和訳、和文英訳の二方向で継続されるであろう。これに対して日本語を介さない情報検索読みや英語のキューによる英問英答、英語表現問題、要約問題は増加気味である。さらに、課題・自由作文形式が増加してきている。文レベルを越えた英語教育を求める声はさらに大きくなりつつあり、訳一辺倒の英語教育から一刻もはやく脱却するためには、テストにも変化を求めて行かねばならない。

第三に言語要素に関する問題はさらに少なく、廃止の方向に向かうべきものであろう。学力観の変化に伴って、言語知識を問うだけのテストではなく、言語使用（コミュニケーション）能力をはかるためのテスト作成を図るためにも、今後さらにテスト形式の多様化、重点化を検討しなければならぬ。

#### 4. おわりに

新・旧のカリキュラムを経てきた受験生に対する入学試験は国立大学のみを取り上げても、節目の年度を挟んで残念ながら大きな変化は認められなかった。これにはいくつかの原因や事情が考えられるが、最大の理由はテスト作成者側の高等学校カリキュラムの変化に対する認識不足であると考えられる。今後とも出題者側の意識の変化を注意深く検討していく必要がある。

テストの持つ機能のひとつとして選別機能のみに注目すれば、妥当性と信頼性という条件を満たせばどのような形式と内容の試験問題を課すことも問題はないであろう。しかしながら、日本という状況で、入試というテストが高校生にとって最大の目標となっている現状では、現場での指導内容との整合性を持たせるためにも、あるいは現場での先駆的な取り組みに正当性を与えるためにも、何らかの意識変化がテスト作成者側に求められているのではないだろうか。本研究において入試問題の分析を通して僅かながら望ましい方向への変化が見受けられた。今後、教授・学習の改善に寄与するために、テストを含めた広く評価する側から変化の方向を模索して行かねばならない。

#### 【参考文献】

青木昭六、田中正道、山岡俊比古、萬谷隆一(1989)『英語のテストィングー実践的アプローチ』開隆堂出版。  
根岸雅史(1997)「新カリキュラム下での大学入試ーどう変わったか・どう変わるのか」『英語教育』1997

年9月増刊号, 4-9.

清水裕子(1997)「『大学入試センター試験』の変遷」『英語教育』1997年9月増刊号, 16-18.

Ingulsrud, H. E. (1997) An entrance test to Japanese universities: social and historical context. In Clifford Hill and Kate Parry (eds.) *From Testing to Assessment: English as an International Language*. Longman. 61-81.

## ABSTRACT

### **A Comparative Study of National Universities' Entrance Examinations in Japan: Regarding a Shift in Test Designs (1996-1997)**

Seiji FUKAZAWA

With a recent revision of high school curriculum in Japan, university entrance examinations are also expected to cope with different groups of learners with different knowledge and skill background. Considering that entrance examinations have always had great influence on teaching and learning English at high school levels in Japan, those involved in test production must be aware of this shift in curriculum design. The purpose of this interim project report is: 1) to compare the entrance examinations of national universities in Japan in the years of 1996 and 1997 and 2) to investigate and identify a change in organizing principles of developing test materials. Although no remarkable changes have been observed in the examinations in these two years, some favorable improvements have been identified.